

## 梶井基次郎の作品における「死」のイメージ

アブドゥエルマクスード・オラービ・ムハマド・ワーイル

カイロ大学文学部日本語日本文学専攻講師

(2014年4月1日提出、2014年5月6日受理)

**キーワード:** 梶井基次郎、「Kの昇天——あるいはKの溺死」、「桜の樹の下には」、「冬の日の」、「死」のイメージ、「生命」

**要旨:** 本論の目的は梶井基次郎の作品における「死」のイメージを把握することである。「死」をテーマとする梶井の作品は数多くあるが、紙量の制限上、「死」のイメージが高い密度で織り込まれている「Kの昇天——あるいはKの溺死」、「桜の樹の下には」、「冬の日の」に絞って、梶井文学の新たな側面を見出すことを試みる。

### はじめに

人類の長い歴史に横たわっている、人間を苦悩に満たした疫病は山ほどある。例えば、10世紀からのハンセン病（癩病）、14世紀からのペスト（黒死病）、15世紀からの梅毒、17世紀からのチフスや19世紀のコレラ・結核、20世紀のインフルエンザ・（例外的に伝染病ではない）癌、20世紀末からのエイズなど、人類が辛く経験してきた疫病は数多くある。ここで、日本の近代を中心として考えてみると、とりわけ上記の疫病の中から結核は作家や詩人や芸術家の病気だと思われるほどたくさんの文学者・芸術家・文芸の天才たちの扉を叩いた。例えば、樋口一葉、森鷗外、田山花袋、堀辰雄、太宰治、福永武彦などの文学者が肺結核を免れ得なかったのである。梶井基次郎はその中の一人であった。

梶井基次郎は大正9年（1920年）5月に肋膜炎に罹り、発熱し、同年9月、肺尖カタルの診断を受け、ひどい患いと長い付き合いを始めたことで、二十歳になる前から最期にかけて、肺結核に生涯の3分の1ほどもひどく苦しめられたわけである。とりわけ、当時は結核が社会病として蔓延し、世の中の乱れの原因の一つだと見なされていた。それは結核死亡者数及び死亡率の年次推移<sup>(1)</sup>を見てみると明らかになる。梶井基次郎の生きた僅か32年（1901～1932年）に結核死亡者数は大凡7万

6千以上～12万未満にも達するからである。また、死亡率（人口10万人対）が1910年に163%以上、1918年に257%を超過し、1932年に179.4%に少し低下したが、また、その後増加していることから明らかである。

梶井基次郎はそのような疫病が世を乱す状況に生まれ、そして、結核に苦しんだが、しかし、そこそが彼が日本近代文学の「珠玉」<sup>(2)</sup>あるいは「昭和の古典」<sup>(3)</sup>としての地位を誇る創作を残すことが出来た理由というわけではないと思われる。

もちろん、以上の恐ろしい死亡者数及び死亡率という社会的な状況を全く無視して研究することも出来ないと論者は思う。そういった境況がほとんどの場合に、影響を及ぼしているはずであろう。例えば、古来、豊富な自然に恵まれた日本人の画家達や作家達は、その自然のおかげで、太陽、海、月、鳥、花、四季などといったものを取り上げた芸術作品を拵で量るほど創作してきたものである。同じ意味で、ある面では結核が梶井の作品に影を落としたのではないだろうか。しかし、く病という状況のみで、文学性の高い作品を遺せるとは限らない。梶井の置かれた状況とともに、彼の才能も重視すべきである。というのは、昭和7年32歳で肺結核により若死にした梶井基次郎の多くない短編小説は、デカダンスや「自然」や「生命」や「闇」や「性」や「死」などを取り上げており、高い密度で織り込まれた作品ばかりだからである。

それらの梶井文学には「死」というキーワードが直接に50回ほど出てくる<sup>(4)</sup>。その意味では、「死」が梶井基次郎の残した小さな世界の基底に創作主体として横たわっていると言

っても過言ではない。そこで論者は、それらの中から梶井文学における「死」のイメージを把握し、梶井文学の新たな側面を見出したい。

梶井文学における「死」のイメージの検討に当たっては、色々な作品が取り上げられる。例えば、「Kの昇天——あるいはKの溺死」（以下、「Kの昇天」）、「桜の樹の下には」、「冬の日」、「冬の蠅」、「城のある町にて」、「交尾」、「のんきな患者」などといった「死」のイメージが豊富な作品である。そこで、論者はその「死」のイメージは創作にどのように現れてくるのかを調べていきたい。

しかし、本稿では紙幅の制限上、その一環として、上記の作品の中から「Kの昇天」という独特な虚構の手法で織り込まれた作品、「桜の樹の下には」、「冬の日」という「珠玉」として評価された三つの作品を分析し、この作品における「死」はどのようなイメージを持っているか、また、どのように読み取れるかを考察してみたい。

### 一、身体が無痛の「死」による魂の「生命」

まず、「Kの昇天」から出発したいと思う。「Kの昇天」は大正15年10月『青空』に執筆された。当時、梶井の健康状態はかなり悪化しており、血痰が出るようになり、また、同年9月、「新潮」より10月新人特集への原稿依頼されたが、原稿を書けず、新潮社へ行き榎崎勤に違約を詫げる、という時期であった。中谷孝雄氏は、「『Kの昇天』を執筆する前後から、梶井の健康に異変が起っているようだ。血痰が出るようになったのである。」<sup>(5)</sup>と言っている。その中谷孝雄氏の記述を根拠にしながら、「Kの昇天」についての考察をしていきたい。

「Kの昇天」は「二重人格」のテーマを扱っている。梶井はドッペルゲンゲルいわゆる「二重人格」というテーマにかなり興味があったようである。が、『檸檬』における「二重人格」のモチーフは作品によって、色々と違ってくると思う。ある場合には、主人公から分かれてきた分身は自分を精神的に支持する役割を果たしているのである。例えば、その空想によって「現実の私自身を見失うのを楽し」む（『檸檬』（1925年）大正14年6月）ということがある。また、別の作品（例えば、ALTER・AGOのK君とその影と魂の昇天する月世

界という三本柱から成立されている「Kの昇天」）に主人公のこの世で自分の限定力で成し遂げ得ないことをその代わりに現実する役割を演じたりしていると考ええる。それは後に詳細に取り上げる。

しかし、そこで、アクセル・ラングランセン氏は「『Kの昇天』の構造分析——あるいは「Kの昇天」の解説——」（清田正喜訳）の末尾に次のように述べる。

「感覚が蘇」らない状態というのは、想像世界が持続している状態をいい、「沖」と「濱邊」を「波」に運ばれて往復する「身體」は死につつあるW（青の療養地のN海岸で偶然にK君と相識った「私」）である。

激浪に形骸の翻弄を委ねたまま、K君の魂は月へ月へ、飛翔し去ったのであります。（135）ママ

この文とともにW<sup>o</sup>（返事を書いている「私」）の追体験が終わり、返事が中途半端に終わって、テキストも終わる。あとは沈黙である。W（「私」）の死である。<sup>(6)</sup>（引用の傍線はラングランセン氏による）

氏は以上のように読み取っているが、論者はその方向性に同意は出来ない。何故ならば、梶井は当時不治である肺結核にかかった時点から、「死」が彼に近寄っているという辛い事実をよく意識しており、逆に、最期まで、「生命」にすがりついて、それを求めていたからである。また、梶井の作品の隅々で隠れて流れているユーモアのセンスに触れると、「私の死」という結論を出し難いと思う。血痰を吐いたり、新潮の新人特集に何も投稿が出来なくなったりと情けない状況に置かれ、不治の病に色々と苦悩を深めた青年（梶井基次郎）は、病気に蝕まれ、健康的な生活が送れないでいる、この世界に対して、「Kの昇天」を通して、むしろ、一時的に病生活から脱出し、要求している「生命」を目差していたのではないかと思うのである。

また、大塚常樹氏は「梶井基次郎『Kの昇天——或はKの溺死』の構造と戦略」では、次のように主張する。

「Kの昇天」ではハイネの詩がシューベルトの曲を伴って使われている。その意味も考えておく必要があるだろう。この二曲が収められたのは同じ『白鳥の歌』という歌曲集である。問題は『白鳥の歌』という題名が《遺書》の意味を持つことだ。

「私」がKに向かって両曲を口笛で吹いたということは、「私」がKの奇異な姿を見て、恋の苦悶が原因の自殺者、というコードを読み取った可能性もあるだろう。とすれば、私に対してKが「先刻あなたはシューベルトの『ドッベルゲンゲル』を口笛で吹いてはいなかったですか」と題名を出して確認した時、Kと「私」との間に《恋の苦悶からくる自殺願望》が暗黙の共通理解として生じたことになるだろう。<sup>(7)</sup>（引用の傍線は論者、以下同じ）

以上のように大塚氏が読み取っているが、論者は氏の意見に賛成しかねる。それは何かというと、**第一には**、『Kの昇天』ではハイネの詩がシューベルトの曲を伴って使われているからと言って、K君は望みどおりにならなかった恋の苦悶のせいで自殺を考えると限らないからである。

**第二には**、同じ論文で、大塚氏は「語り手はさらに、Kが、影に憑かれた初発と思われる事件について（中略）『そんなことまで話すK君でした』と言う。ここからは共示として、Kと『私』が『そんなことまで話』をするほど打ち解けて、何もかもが告白されていた可能性が暗示されているだろう」<sup>(8)</sup>という。が、もし、それは氏が主張する通りであるならば、むしろ、K君が「私」にその叶わぬ恋の苦悶の話をも打ち解けるはずなのではないだろうか。あるいは、むしろ「そこまで話」をしたK君はその叶わぬ恋の苦悶を暗黙の共通理解よりも、ほんのわずかなことを話したり、婉曲にほのめかしたりするはずであろう。却って、「Kの昇天」ではK君及び「私」は恋や恋の苦悶に悩まされているということは直接的にも間接的にも一切ないのである。

**第三には**、もしも、氏の言う通り「Kと『私』との間に《恋の苦悶からくる自殺願望》が暗黙の共通理解として生じたことになるだろ

う（原文ママ）」ならば、まず、「私はあなたのお手紙ではじめてK君の彼地で溺死を知ったのです。私は大層おどろきました。」（「Kの昇天」の冒頭）」ということはあるはずはないであろう。次に、「あなた」に疑われているならば、「もし、私の直感が正鵠を射抜いていましたら、影がK君を奪ったのです。」という「私」が自分の思考をそのような方向に向かわせるより、むしろ、その疑念を晴らすように、Kと自分の間に生じた《恋の苦悶からくる自殺願望》の暗黙の共通理解を「あなた」に打ち解けるはずであろうと考えられるのではないか。

さて、「Kの昇天」の本文の分析に取り組んで、作品における「死」のイメージをどのように読み取ることが出来るのかを考察してみたい。以下、冒頭部分である。

お手紙によりますと、あなたはK君の溺死について、それが過失だったろうか、自殺だったろうか。自殺ならば、それが何に原因しているのだろうか、あるいは不治の病をはかなんで死んだのではなかろうかと様ざまに思い悩んでいられるようであります。そしてわずか一と月ほどの間に、あの療養地のN海岸で偶然にも、K君と相識ったというような、一面識もない私にお手紙を下さるようになったのだと思います。私はあなたのお手紙ではじめてK君の彼地で溺死を知ったのです。私は大層おどろきました。と同時に「K君はとうとう月世界へ行った」と思ったのです。どうして私がそんな奇異なことを思ったか、それを私は今ここでお話ししようと思っています。それはあるいはK君の死の謎を解く一つの鍵であるかも知れないと思うからです。<sup>(70頁)</sup>

この冒頭の部分で一番指摘しておきたいのは傍線語句の「とうとう」である。それはちょっとした言葉にすぎないが、深い意味があると論者は思う。というのも、「終わりに」、「最後に」、「やっと」などという意味がある「とうとう」を使用すると、それは長期、あるいは長いプロセスの終わりという微細なニュアンスを心に残すものだからである。要するに、あたかも、「『K君はとうとう月世界へ行った』と思ったのです。」という文章を通して、二つの示唆を「あなた」という人物及び「読者」にも与えられているようである。その一つは月世

界へ行くということはなかなかのことで、かなり難しいことである。が、全然無理ではあるまい。それは「あなた」及び「読者」に、まるで、「Kの昇天」という独特な虚構の作品をノンフィクションのようだと思わせるための一つの戦術的な表現の仕方だと思われる。

二つ目の示唆は更に大事だと考える。それはK君の強い意志である。つまり、K君がずっと心の奥底から、長期に渡り、数々のプロセスを経て辿りついた後、やっとのところで月の世界へ行くことが出来たということが、小語である「とうとう」の裏側にある意味から読み取ることが出来るのではなからうか。とにかく、その二つ目のヒントから、分身であるK君という人物は、月世界へ昇天することによって病の苦悩などのような辛いことばかりであふれた生活から助けだされと思ったのではないか。そして、作家である梶井基次郎にとって、それを書くことは一時的にでも、救われることを意味したのではないかとはいきりと推定されるだろう。

また、四段落目から見てみると、「というのは、その人影——K君——は私と三四十歩も距っていたでしうか、海を見ろというのでもなく、まったく私に背を向けて、砂浜を前に進んだり、後に退いたり、と思うと立留まったり、そんなことばかりしていたのです。(中略)「そしてその人影の方へ歩きはじめた。その人影に私の口笛は何の効果もなかったのです。相変わらず、進んだり、退いたり、立留まったり、の動作を続けているのです。近寄ってゆく私の足音にも気がつかないようでした。ふと私はビクッとしました。あの人は影を踏んでいる。もし落とし物なら影を背にしてこちらを向いて捜すはずだ」<sup>(71~73頁)</sup>が、「K君は自分の影を見ていた、と申しました。そしてそれは阿片のごときものだ、と申しました。」<sup>(75頁)</sup>というところである。傍線部から分かるようにK君は前に進んだり、後に退いたり、立ち留まったりしながら、自分の影を見つめていた。K君のその見惚れられた様子を考えると、あたかもその影が自分の身体よりも現実らしく感じられるようであるから、そんな状態にいたと考えられる。

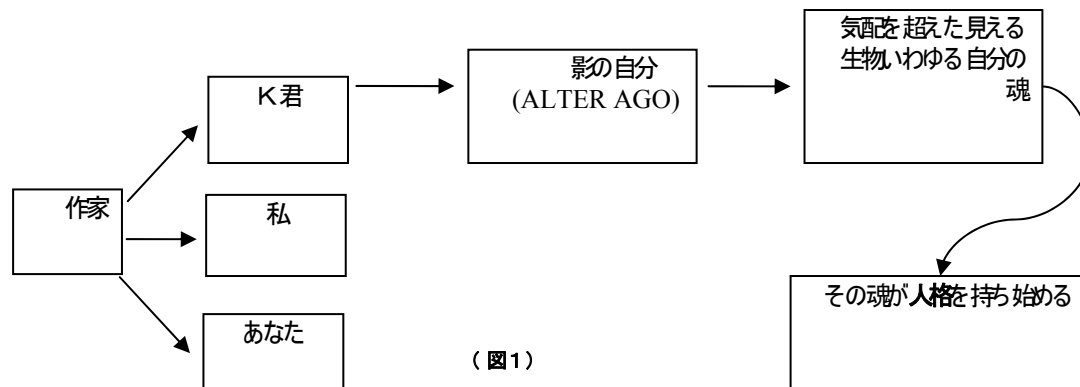
また、その影は阿片のごときのものであるということは阿片の特色のあるものであるという意味が読み取れると考える。つまり、自分自身の身体から離れ、影として生きているようであるから、まるで、鎮痛され、睡眠状態にあるような気持ちである。そうすると、病の苦悩や蝕まれた身体などと

いった辛いことばかりから一時的に(まるで、阿片を吸ったように)脱出することが出来るというように読み取れるのではないかと思う。

では、次の部分に目を止めてみたいと思う。「影ほど不思議なものはないとK君は言いました。」「影をじーっと視凝めておると、そのなかにだんだん生物の相があらわれて来る。外でもない自分自身の姿なのだが。それは電燈の光線のようなものでは駄目だ。月の光が一番いい。(中略)そのうちに自分の姿がだんだん見えて来るのです。そうです。それは『気配』の域を超えて『見えるもの』の領分へ入って来るのです。」<sup>(75~76頁)</sup>、「不思議はそればかりではない。だんだん姿があらわれて来るにしたがって、影の自分は彼自身の人格を持ち始め。それにつれてこちらの自分はだんだん気持ちが香かになって、ある瞬間から月へ向かって、スースーツと昇って行く。」<sup>(77頁)</sup>、「『私も何遍やってもおっこちるんですよ』」<sup>(78頁)</sup>という。下記の(図一)を見てみよう。

つまり、K君は自分の影いわゆる(ALTER AGO)をじっと視凝めると、そのなかに生きている自分の魂が現われる。そして、不思議はそれのみならず、つまり、K君は月世界に生きている自分自身の魂であるその影を見つめているうちに、その魂が「人格を持ち始める」のである。というのは、その魂が新しい世界(月世界)につり合えるように自分の認識的、感情的、意思的な特徴を持ち始める。それにつれて、K君は思わず心がわくわくし、月世界へ昇って行きたがるのである。色々と病に悩まされたことを逃れたがるK君は何遍も昇天を試みるが、まだ、それが許されていない故、落ちているばかりである。

要するに、論者の読み方では病の苦悩であふれたこの世から魂が生きていける月世界に移るにはプロセスがあるわけである。それは「K君の瞳はだんだん深く澄んで来、頬はだんだんこけ、あの高い鼻柱が目立って硬く秀でて参ったように覚えていきます。」<sup>(80頁)</sup>、「K君は病と共に精神が鋭く尖り」<sup>(81頁)</sup>などといった文章からはっきり分かると思う。そして、そのプロセスの最後に来る「死」によって、K君が望ましい月世界に移ることが出来る。まるで、「死」がなければ、昇天のプロセスが完成しないようである。要するに、昇天のプロセスにおける「死」は最も大事な役割を果たしている要素だと言えるだろう。



しかし、「その夜は影が本当に『見えるもの』になったのだと思われます。肩が現われ、頸が顕われ、微かな眩暈のごときものを覚えると共に、『気配』のなかからついに頭が見えはじめ、そしてある瞬間が過ぎて、K君の魂は月光の流れに逆らいながら徐々に月の方へ登ってゆきます。」<sup>(81頁)</sup>、「そしてその形骸は影の彼に導かれつつ、機械人形のように海へ歩み入った」、「K君の身体は仆れると共に沖へ運ばれました。感覚はまだ蘇えりません。」、「また沖へ引去られ、また、浜辺へ叩きつけられました。」、「ついに肉体は無感覚で終わりました。」、「しかも、魂は月の方へ昇天してゆくのです。」<sup>(82頁)</sup>という部分を考えると、上述の「死」とはK君の**身体のみ**の死だということが分かる。さらに、その身体は「無感覚」で、痛むことなく終わる。また、そこにある「無痛性」という点も看過するわけにはいかなないのであろう。一方、その魂はより健康的に生きていける月世界に住むことになる。要するに、魂の「生命」に対して、身体**の無痛の「死」**が対照的に描かれているのである。

その昇天のプロセスやK君の最期を次の「K君の魂は月へ月へ、**飛翔**し去ったのであります。」<sup>(83頁)</sup>という大事な部分を指摘しながら、分析してみたい。この文章における「飛翔」という言葉を考えてみよう。それは二つの分析が出来ると思う。一つ目はK君の魂が**より元気で、健全なもの**だということの意味である。というのは、K君は魂が月世界に昇天し始めた途端に、健康を回復したのである。二つ目は「飛翔」という言葉自体から更によく感じるのはK君が**喜ばしく昇天した**様子である。

## 二、〈美〉を保障するイメージ

次に北川冬彦や淀野隆三らが新しく出した『詩と詩論』第2号(昭和3年12月刊)に散文詩として掲載された「桜の樹の下には」を取り上げて、そこにおける「死」のイメージを把握したい。まず、桜の樹の下に死体が埋まっているという着想及びその背景については、「ボードレール『パリの憂愁』中「射撃場と墓場」に「腐肉のために肥えふった華麗な花々の絨毯」の語があり、ムンクの画に、樹木の根方に死骸が埋まる「新陳代謝(別名、二人の人間)」(1899年)がある。日本画でも、大正九年ころの作と推定される尾竹竹坡の三幅対の中央は、地中の胎内から養分を吸いあげる生命樹の構図。」<sup>(9)</sup>などに見られていた。

それでは作品の分析に入りたいと思う。作品の冒頭を見てみよう。

桜の樹の下には屍体が埋まっている！

これは信じていいことなんだよ。なぜって、桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことじゃないか。俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だった。しかしいま、やっとわかる 때가来た。桜の樹の下には屍体が埋まっている。これは信じていいことだ。<sup>(43頁)</sup>

作者が以上の冒頭で「桜の樹の下には」の幕を開く。その起首である「桜の樹の下には屍体が埋まっている！」という断定的な文章は、まるで主人公の色々と苦悩して、十分に考えた上の固定観念であり、あるいは結論のよう

である。また、それを再確認するのに、自信をもって「これは信じていいことなんだよ。」と述べる。それは桜の樹の神秘的な〈美〉が引き起こす不安感を解消するため、そのようなことを思ったからであろう。そして、以下にその結論を出した理由を明確する。

ここでは、まず、主人公の身の回りに「一種神秘的な雰囲気感を撒き散ら」している桜の樹の「人の心を撲たずにはおかない、不思議な、生き生きとした、美しさ」<sup>(44頁)</sup>が不安感や苛立たしい気持ちを起こしているのは、その見事な美しさの原因が不明だと思われるからである。

次に、主人公のその心を陰気にした気持ちや不安感を解消するための作戦を考えてみたいと思う。「俺の心に憂鬱が完成するときばかり、俺の心は和んで来る。」<sup>(46頁)</sup>という大事な文章を出発点として考慮してゆくと、主人公は桜の樹が自分の心に引き起こした「不安」から自由になったり、村人と同様に花見を楽しめたりするのに、その神秘的な美しさに適応する納得の出来る理由を見つけ出そうとする。そこで、自分の心に憂鬱が完成するのに、「死」に連想する思いを凝らすのである。要するに、「桜の樹の下には」における「死」の役割は、まず主人公の心に憂鬱を完成させることだと言ってもいいだろう。また、この作品における「死」のイメージはその点から出発し、作品の正面から末尾まで活気に溢れた様子で浮かんで来る。

例えば、第二段落を見てみよう。

どうして俺が毎晩家へ帰って来る道で、俺の部屋の数ある道具のうちの、選りに選ってちっぽけな薄っぺらいもの、安全剃刀の刃なんぞが、千里眼のように思い浮んで来るのか——お前はそれがわからないと云ったが——そして俺にもやはりそれがわからないのだから——それもこれもやっぱり同じようなことにちがいない。<sup>(43頁)</sup>

第二段落には以上の部分があるが、それはこの作品が「詩と詩論」に掲載された時には次のようであった。

それにしても、俺が毎晩家へ帰ってゆくとき、暗のなかへ思い浮かんで来る、剃刀の刃が、空を飛ぶ虻のように、俺の首動脈へ

噛みついて来るのは何時だろう。これは洒落ではないのだが、その刃には、

EVER

READY (さあ、何時なりと)

と書いてあるのさ。(旧字体の変更は論者、以下同じ)<sup>(10)</sup>

このような『檸檬』の編集の時に省かれた第四段落にかかっているが、そこでは主人公は桜の樹が自分の心に引き起こした不安感を解消するのに、最初に自分の死の情景を想像する。そして、再び第三段落で「桜の樹の下には屍体が埋まっている！」という基本のモチーフに戻る。そこで、最初に出した結論への段取りを下記のように詳説する。

馬のような屍体、犬猫のような屍体、そして人間のような屍体、屍体はみな腐爛して蛆が湧き、堪らなく臭い。それでいて水晶のような液をたらたらとたらしている。桜の根は貪婪な蛸のように、それを抱きかかえ、いそぎんちゃくの食糸のような毛根を聚めてその液体を吸っている。

何があんな花卉を作り、何があんな蕊を作っているのか、俺は毛根の吸いあげる水晶のような液が、静かな行列を作って、維管束のなかを夢のようにあがってゆくのが見えるようだ。<sup>(44-45頁)</sup>

ここでは「死」を連想させる様々な死体から桜の根が水晶のような液体を吸い上げることで、「死」から「生命」が生まれると言えるのではないか。更に、「死」と「生」が隣り合わせで、平行に存在するイメージもある。

そうして、「俺」の考え出したことの結果は、次のようである。

いまようやく瞳を据えて桜の花が見られるようになったのだ。昨日、一昨日、俺を不安がらせた神秘から自由になったのだ。<sup>(45頁)</sup>

ここで、「死」は桜の樹が吸い込む栄養液体の源となるのである。しかし、「俺」はこの程度で満足しかねるから、心の中に憂鬱が完成するのに、自分の「死」や桜の樹の下に埋まっている動物や人間などといったものの「死」

では不十分である。そこで、薄羽かげろうの生死までを次のように描く。

彼等はそこで美しい結婚をするのだ。しばらく歩いていると、俺は変なものに出喰わした。それは溪の水が乾いた磧へ、小さい水溜を残している、その水のなかだった。思いがけない石油を流したような光彩が、一面に浮いているのだ。お前はそれを何だったと思う。それは何万匹とも数の知れない、薄羽かげろうの屍体だったのだ。隙間なく水の面を被っている、彼等のかさなりあった翅が、光にちぢれて油のような光彩を流しているのだ。そこが、産卵を終った彼等の墓場だったのだ。<sup>(45-46頁)</sup>

このような少し長い引用においては、「死」のイメージが〈美〉のイメージと深く結びつく。つまり、薄羽かげろうの「死」はもちろん悲しい思いを引き起こす上に、まるで、「光にちぢれて油のような光彩を流している」心を打つ美しい絵を描いているようだ。また、「生」のプラスイメージである「薄羽かげろう」の「美しい結婚」は、〈生命力〉を感じさせる場面である上、その直後に「産卵を終った」「何万匹とも数の知れない、薄羽かげろうの屍体」とその「墓場」の場面から、「死」は「生」と平行に存在して描かれることを指摘することができる。

そこでは、「俺はそれを見たとき、胸が衝かれるような気がした。墓場を発いて屍体を嗜む変質者のような残忍なよろこびを俺は味わった。」<sup>(46頁)</sup>という主人公の変った状態が注目される。そして、その残忍な喜びは主人公に必要とされる憂鬱が完成する気がしたからではないかと考えられる。しかし、逆に、そのような気がすると思ったら、「この溪間ではなにも俺をよろこばすものはない」と感じ、周囲の「鶯や四十雀も、白い日光をさ青に煙らせている木の若芽も」ただの「もうろうとした心象に過ぎない」<sup>(46頁)</sup>と痛感する。そして、やはり憂鬱感が思うように完成しないので、「俺には惨劇が必要なんだ」という主人公の不満足な気分が絶頂に達して、次のように思う。

俺の心は悪鬼のように憂鬱に渴いている。  
俺の心に憂鬱が完成するときにばかり、俺の心は和んで来る。<sup>(46頁)</sup>

そこで、主人公の「俺」は自分に必要とされる憂鬱完成が次のような空想のできるのである。

——お前は腋の下を拭いているね。冷汗が出るのか。それは俺も同じことだ。何もそれを不愉快がることはない。べたべたとまるで精液のようだと思ってごらん。それで俺達の憂鬱は完成するのだ。<sup>(46頁)</sup>

ここでは、最後にその憂鬱を完成させた「精液」について考察したい。ここに主人公の憂鬱を完成させた精液は「生」ではなく、より「死」に近いイメージがあると考えられる。はっきり言えば、「精液」はそのものが「生命」を象徴し難いのではないか、つまり、そのものに必要とされる環境がないと、「生命」との繋がりが弱いと言ってもいいだろう。そこで、「生」ではなく、より「死」に近いものというイメージがあるのではないか。そうすると、やっと主人公の憂鬱感が完成され、心も和む状態になったので、右のような文章で「桜の樹の下には」の幕を閉じる。

今こそ俺は、あの桜の樹の下で酒宴をひらいている村人たちと同じ権利で、花見の酒が呑めそうな気がする。<sup>(47頁)</sup>

以上に見てきたように、この作品における「死」のイメージは主人公に必要とされる憂鬱感を完成させる役割を果たしているのである。それは主人公の「死」や桜の樹の下に埋まっている馬、犬猫、人間のような死体や薄羽かげろうの「死」や最後に憂鬱をさせる「生命」より、「死」に近い精液などという場面に現れてくる。そして、まるで「桜の樹の下には」におけるそのような役割を果たす「死」のイメージは、主人公の心に畏怖の念や不安を引き起こした「不思議な、生き生きとした」桜の樹を主人公の目に異常なくの美しさで反映したり、その美しさへの印象を好ましい方に変えたりしたことで、調整者のようだという事を言ってもいいのだろう。それと同時に、この作品における「死」のイメージが〈美〉の裏に存在し、〈美〉を支える役割も果たしているものだということも言えるだろう。そこで、この桜の樹の見事な美しさは「死」があつての〈美〉

だと考えられるのであろう。言い換えれば、「

死」が〈美〉を保障している役割を果たしているのである。

他方、〈美〉は「死」に宿るところを提供したり、「死」の醜さを隠したりしている役割を果たしている。まるで、「死」と〈美〉がお互いに自分の存在を支え合いながら、存在しているようである。

### 三、逃れられぬ〈定め〉

最後に、「青空」昭和2年2月号、同年4月号、2回にわたって発表された「冬の日」を取り上げて分析しながら、梶井文学に根強い要素だと考えられる「死」がその作品にどのような姿で現出しているのかを考察してみたい。

#### ① 「冬至」の「風景」

季節は冬至に間もなかった。堯の窓からは、地盤の低い家々の庭や門辺に立っている木々の葉が、一日ごと剥がれてゆく様が見えた。

ごんごん胡麻は老婆の蓬髪のようにになってしまい、霜に美しく灼けた桜の最後の葉がなくなり、櫟が風にかさかさ身を震わすごとに隠れていた風景の部分が現われてきた。  
(297頁)

以上の「冬の日」の冒頭に目を通してみると、作者の選択した語句は「死」の豊富なヒントばかりを与えているのではないか。また、「生命」が崩壊し、「死」に瀕する勘が作者に筆をとらせたのではないかという印象が強い。まず、作品の時節を考えてみよう。次のように、春に生まれ、夏に生き生きと活動し、秋に病で死にかかり、冬に死ぬという四季が与えてくれるイメージを前提として考察してみると、「冬の日」の最初の文章における「冬至」はそのような意味があると思う。また、身の回りの木々が散り乱れたり、桜の木でさえ、**最終**の葉をなくしてしまったり、胡麻も乾燥しすぎたので、年齢を加えすぎた女の乱れ髪のように見えたりするという心象は、まるで周辺の樹木に何の「生命」もなく、完全に死について無条件に降伏しているように思われる。

また、「もう暁刻の百舌鳥も来なくなった。そしてある日、屏風のように立ち並んだ櫟

の木へ鉛色の椋鳥が何百羽と知れず下りた頃から、だんだん霜は鋭くなってきた」(297頁)という一行もあるが、それは以上の心象の完成の部分である。というのは瀕死状態になっているのは樹木のみならず、周辺に生存している動物もそうだからである。例えば、以前にその周辺に繁殖していた昆虫や蛙などを捕食する百舌鳥でさえ、獲物がいなくなったため、去って行ったのである。さらに、鳴き声の甚だ騒がしくて、憂鬱な色のある椋鳥が数多く増えたり、天候も徐々に寒くなってきたりしているという荒涼たる風景は〈生命力〉をなくしてしまう雰囲気をかもし出すものである。さらに、「冬の日」その(一)を締めくくる次の描写も見てみよう。

展望の北隅を支えている櫟の並樹は、ある日は、その鋼鉄のような弾力で撓ない踊りながら、風を揺りおろして来た。容貌をかえた低地にはカサコソと**枯葉が骸骨**の踊りを鳴らした。  
(299頁)

この部分において、「死」が露骨に周囲の全てのもの(枯葉でさえ)を情けなく襲撃しているという描写も看過できないのである。このように、作者は堯の周囲の生気のない自然を素材として、全般の風景が「死」に攻められ、完全に征服しているという背景を具体的に描いたと言えるであろう。また、以上に取り上げた心象は、以下に来る主人公の心理的・感情的・精神的な状態の背景になると考える。

冬になって堯の肺は疼んだ。落葉が降り溜っている井戸端の漆喰へ、洗面の時吐く痰は、黄緑色からにぶい血の色を出すようになり、時にそれは驚くほど鮮やかな紅に汚れた。  
(298頁)

主人公である堯も周辺の生物の世界の一部として、身の回りの桜、櫟、櫟、百舌鳥、椋鳥などと同様ではないかと考えられる。つまり、彼も周囲の環境の影響を受け、冬が近づくにつれて、身体状態がおかしくなり、病状も進み、「死」に接近している予兆だと考えられる血痰を出しても、「なんの刺戟もなくなっていた」という病に蝕まれた体の状態をはっきり現す一節がある。一方、「堯はこの頃生きる熱意をまるで感じなくなっていた。一日一日が彼を引き摺っていた。そして、裡にすむべきところを



なくした魂は、常に外界へ逃れよう逃れようと  
焦慮っていた」<sup>(298頁)</sup>という病に散乱してしま  
った魂の状態も明示する一節もある。

そこで、「Kの昇天」と同様に「冬の日」にも魂が身体の外から出て行きたがると言及するまでもない。しかし、「Kの昇天」に現れる魂はALTER・AGOであるK君の魂に対して、「冬の日」に現れるのは主人公の魂だということが看過されてはならないであろう。また、以上に取り上げた「Kの昇天」の読み方によると、まるで、「Kの昇天」における「外界」である月世界へ昇天することに努めるALTER・AGOの魂によって、婉曲に救いかわゆる「生命」を要求しているのに対して、他方、「冬の日」に現れる主人公の魂によって、「生命」を紛失することを覚悟しているようである。そこで、梶井の想念は「Kの昇天」の段階から「冬の日」の段階にかけて、大幅に違ってきたのではないだろうか。

このようにして、上述したように「Kの昇天」における「死」のイメージは「生命」への手法のようであることに対して、「冬の日」に現れる「死」は健康な人生を送ることに絶望した主人公の悲愴な〈定め〉のようである。要するに、どちらの作品においても魂は身体の外に「外界」に逃れようとしているが、「死」のイメージは正反対の方向に進んでおり、別の姿で出現されているのである。

そのみならず、また、「昼は部屋の窓を展いて盲人のようにその風景を凝視める。夜は屋の外の物音や鉄瓶の音に聾者のような耳を澄ます。」<sup>(298頁)</sup>という一行もあるが、そもそも見ることもできない盲人が見つめるという事はある得ず、また、聞くこともできない聾者が耳を澄ますというのも不可能である。そういう意味では、盲人や聾者のようである堯は明るい昼に見つめたり、静かな夜に耳を澄ましたりしても、何も見たり、聞こえたりすることが出来なくなって来たのである。それは、「外界へ逃れよう逃れよう」としている魂と結びつけて考慮してみると、まるで「死」が徐々に主人公の身体に侵入するようになり、その結果は視力や聴力を失っているようである。要するに、それは主人公が部分的に死んでいるという意味があるのではないかと論者は思う。

最後に、堯の「新鮮な喜び」の〈挫折〉に注目したい。「夜更けて彼が便所へ通うと、小窓の外に屋根瓦には月光のような霜が置いている

。それを見るときにだけ彼の心はほっと明るむのだった」<sup>(313頁)</sup>、また、「白い冬の面紗を破って近くの邸からは鶴の啼き声が上がった。堯の心もそんなときにはなにか新鮮な喜びが感じられるのだった。」<sup>(314頁)</sup>が、やはり、「この頃生きる熱意をまるで感じなくなり」、死相を帯びている「裡に住むべきところをなくした魂は」その新鮮な喜びを「自分の身に当て嵌めることは出来なかった。」ということのである。それもまた、「彼は幾度も心を取り直して生活に向かって行った。が、彼の思索や行為はいつの間にか佯りの響をたてはじめ、やがてその滑らかさを失って」<sup>(302頁)</sup>しまうことを強調するのである。

## ② 「落日」と「不思議な影」

「冬の日」その(一)において、次のような一節がある。

冬至に近づいてゆく十一月の脆い陽ざしは、しかし、彼は床を出て一時間とは経たない窓の外で、どの日もどの日も消えかかって行くのであった。翳ってしまった低地には、彼の棲んでいる家の投影さえ没してしまっている。それを見ると堯の心には墨汁のような悔恨やいらだたしさが拡ってゆくのだった。日向はわずかに低地を距てた、灰色の洋風の木造家屋に駐っていて、その時刻、それは何か悲しげに、遠い平地へ落ちてゆく入目を眺めているかのように見えた。<sup>(298-299頁)</sup>

それを考えてみると、なぜ主人公は「日も消えかかってゆく」ことを悲しげに眺めていたのかと思うが、やはり、それは太陽が〈生命の源〉だと思っているからであろう。そのような推定の根拠を下記の「冬の蠅」の引用文と結びつけて提示したいと思う。「平俗の日なた奴！早く消えろ。いくら貴様が風景に愛情を与え、冬の蠅を活気づけても、俺を愚昧化することだけは出来ぬわい。」<sup>(348頁)</sup>という主人公が自分に「生命」を与えてくれぬ太陽に対する怒りをぶちまけるということがはっきり分かるが、いくら日が主人公の非難の矢面に立っても、それは一概に主人公に嫌われているという意味ではない。風景に愛情を与えたり、冬の蠅を元気づけたりする日だと思っている主人公は否応なしに日が消え(死に)かかって行くのを悲愴に眺めざ

るを得なくなると考えられる。

また、「冬の日」の終章にも次のような一節も見られる。

何が彼を駆るのか。それは遠い平地へ落ちて行く太陽の姿だった。

彼の一日は低地を距てた灰色の洋風の木造家屋に、どの日もどの日も消えてゆく冬の日に、もう堪えきることが出来なくなった。窓の外の風景が次第に青ざめた空気の中へ没してゆくとき、それがすでにただの日蔭ではなく、夜と名付けられた日蔭だという自覚に、彼の心は不思議ないらだちを覚えて来るのだった。 (322頁)

この一節は以上に取り上げた引用文の波線部と一段と重複すると思う。が、主人公の心の深部にそのような悲しい思いを起すことを同じ作品の序章にも終章にも二回出てくることは非常に大事な含蓄のあることに相違ないのではないか。

しかしながら、太陽が沈んでいくことが主人公を悲ませるということはあえて不思議ではないと思う。以上に論証したように、日没とは、情熱をもって一心に「生命」を求めたり、日光の満ちた空気が必要とされたりしている肺病の患者である主人公にとって〈生命の象徴〉あるいは〈生命の源〉だと見なされる太陽が沈ん(死ん)で行くという意味があるからこそ、彼の「心には墨汁のような悔恨やいらだたしさが拵ってゆく」ことは一向に驚くに足りない。

また、「『あああ大きな落日が見たい』彼は家を出て遠い展望のきく場所を捜した。」 (322頁) という一行も主人公の以上の気持ちを更に証明する。つまり、その一行はどうせ毎日のように「どの日もどの日も消えて行く」ことに決まっているならば、可能な限り「冬の日」を最終の瞬間まで眺めたがる主人公の心情をまざまざと明示しているのではないか。そこで、「何か彼を駆るのか。それは遠い平地へ落ちて行く太陽の姿だった。」のに対して、まるで、主人公も太陽を追い掛ける姿で現れてくるようである。

次に、その「落日」に関する次の部分も見てみよう。

青く澄み透った空では浮雲が次から次へ美しく燃えていった。みたされない堯の心の燠にも、やがてその火は燃えうつった。

「こんなに美しいときが、なぜこんなに短いのだろう」

彼はそんなときほどはかない気のするとき  
はなかった。 (323頁)

そこには、梶井文学のデカダンスを味読するに足る一節がある。梶井文学に耽読すると、ほとんど「美」と消極的・否定的なイメージは切り離さずに付き纏っていると言ってもよいと論者は思う。例えば、下記の「それが現実であるかのような暗愁が彼の心を翳って行った。またそんな記憶がかつての自分にあったような、一種訝しい甘美な気持が堯を切なくした。」 (308頁)、「そんな風俗画は、町がどこをどう帰っていかかわらなくなり始めるにつれて、だんだん美しくなった。」 (322頁)、「桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことじゃないか。俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だった。」(「桜の樹の下には」 (43頁))、「この美しい水音を聴いていると、このあたりの風景のなかに変な錯誤が感じられて来るのであった。(中略)変な錯誤の感じとともに、訝しい魅惑が私の心を充たして来るのだった。」(「笥の話」 (338頁))という様々な作品からの引用文がそのことをまざまざと証明するのである。そこで、何故「こんなに美しい」太陽が沈(死)んで行くことが主人公に悲しい思いを想起させるかがはっきり窺えるだろう。まとめて言えば、ここに現れる切ない悲しみと美しさの混ざった場面は梶井文学の特徴だと論者は思う。

また、次の「あすこの雲へゆかないかぎり今日ももう日は見られない」 (324頁) という一行も、どのように主人公が〈生命の象徴〉である太陽を沈んで欲しくないという心情を抱いているかははっきり現わしているのではないか。その上に、主人公は「今日ももう日は見られない」という自分の悲愴な運命を嘆く微妙なニュアンスもある。従って、「にわかに重い疲れが彼に凭りかかる。知らない町の知らない街角で、堯の心はもう再び明るくはなかった。」 (324頁) という「落日」につれての自然発生的な反応は主人公の肉体的・精神的・感情的な様子を明白にするのである。

更に、「家の投影さえ没して」<sup>(298頁)</sup>しまうということも、堯をいらいらさせたり、悲しませたりする筈である。家の影が無くなるということは、自分自身の影も無くなるという意味である。従って、自分よりも現実らしく感じられる自分の分身がなくなる。そういう意味では、影が無くなるということは自分の「死」の予兆だという意味もあるのである。では、「不思議な影」に関する「冬の日」その(一)からの次の部分も見てみよう。

冬陽は郵便受けのなかへまで射しこむ。路上のどんな小さな石粒も一つ一つ影を持っていて、見ていると、それがみな埃及のピラミッドのような巨大な悲しみを浮べている。——低地を距てる洋館には、その時刻、並んだ青桐の幽霊のような影が写っていた。向日性を持った、もやしのように蒼白い堯の触手は、不知不識その灰色した木造家屋の方へ伸びて行って、そこに滲み込んだ**不思議な影**の痕を撫でるのであった。彼は毎日それが消えてしまうまでの時間を空虚な心で窓を展いていた。<sup>(299頁)</sup>

そこに見られる「不思議な影」だという大事なキーワードを下記の「影ほど不思議なものはないとK君は言いました。」、「影をじっと凝視めておるとそのなかにだんだん生物の相があらわれて来る。外でもない自分自身の姿なのだが」<sup>(75頁)</sup>という「Kの昇天」にある一節に現れる同じキーワードと結び付けて考察すると、「Kの昇天」における影は「生命」をもたらしものとして現れてくるのに対して、「冬の日」の以上の引用文によって、エジプトのピラミッドのような膨大な悲しみや枯れてしまった蒼桐の亡魂のように表現されるのである。それのみならず、「生命」の崩壊過程を進行している死相を帯び、「生命」への別れを告げる寸前の主人公は死体のような蒼白い手で無くなった影の痕を空しく撫でる。このようにして、身の回りのすべてのものが無くなり、幽霊のように出現される影でも無くなる。そして、最後に影の死体いわゆるその痕しか存在しないというような複雑な心象はどのように「死」が主人公の精神的・心理的な内面に影を落としているのか分かることができるだろう。

### ③ 「死」の〈回想〉

さて、「冬の日」その(二)からの次の引用箇所を見てみよう。

堯の弟は脊椎カリエスで死んだ。そして、妹の延子も腰椎カリエスで、意志を喪った風景のなかを死んで行った。そこでは、たくさんの虫が一匹の死にかけている虫の周囲に集って悲しんだり泣いたりしていた。<sup>(301頁)</sup>

ここでは、主人公は「冬の日」その(一)と違って、身の回りの「生命」のない自然風景ではなく、自分と家族の悩みや弟妹の「死」の〈回想〉に耽るのである。しかし、その〈回想〉を起こしたのは何なのだろうか。きっと、健康な人生が送れない主人公は「死」に攻め立てられているという不安の念に苛まれていることが原因だと考えられるのであろう。そして、「たくさんの虫が一匹の死にかけている虫の周囲に集って悲しんだり泣いたりしていた」という比喩は梶井が同胞ではない妹が亡くなった後、大正13年11月に発表した「城のある町にて」の「ある午後」という章にも変わりもなく、そっくりそのまま現れてくるのである。その重複は作者が失言し、あるいは、作者が一本調子で筆を執っているという人がいるかもしれないが、年月が経っても、その表現が変わりなく作者の頭に残り続けているというのは、その表現自体が梶井の心の奥底にある心情や想念や思い出などのようなことと深く繋がっているからなのではないか。

そして、その比喩を考えてみよう。主人公は死にかかっている妹を一匹の虫に例えている。死にかかっている人は無力であり、虫のようだと例えるのは当然のことである。しかし、死にかかった妹の周囲にいる主人公とその家族も、泣いたり悲しんだりしているたくさんの虫として例えたことは看過されてはならないと思う。たぶん、それは主人公が妹の身の回りにいる自分自身も家族も「死」に対して、どうすることも出来ない虫のような存在だということを痛感していたので、そのような表現が選ばれたのではないだろうか。また、その比喩はどのように主人公が「死」の不安に周章狼狽しているのかをはっきりと明らかにするのである。

それ故に、「**堯の頭には彼にしばしば現前する意志を喪った風景が浮びあがる**」<sup>(301頁)</sup>のであろう。「意志を喪った風景」、まず、語りは何の意志かはっきりしないが、それは「生命」への意志だと考えられるのである。また、彼に同じ風景がたびたび目の前に現れるということは、やはり、「この頃生きる熱意をまるで感じなく」なった主人公にそうすると不思議ではないと考えられるのである。更に、それは堯が精神的に死ぬ覚悟に敗れ過ぎ、死ぬことに対する抵抗感を覚えなくなった様子を如実に反映しているのではないか。では、堯の次の〈回想〉も見てみよう。

穉い堯は捕鼠器に入った鼠を川に漬けに行った。透明な水のなかで鼠は左右に金網を伝い、それは空気のなかでのように見えた。やがて鼠は網目の一つへ鼻を突込んだまま動かなくなった。白い泡が鼠の口から最後に泛んだ。・・・<sup>(302頁)</sup>

また、堯は〈回想〉を連続的にして行く。最初は、弟妹の「死」を思いめぐらしたが、以上の一節では自分が幼児の頃に捕まえた鼠を川に浸しに行ったというずいぶん遠い過去のことを顧みるのである。しかし、なぜ主人公が「死」に関する自分の回顧録からとりわけそのようなことを頭に浮かべさせたのであろうか。それは、最初に考えられるのは白樺派の志賀直哉氏の「城の崎にて」(「白樺」大6年5月)という作品からの影響だと考えられるに相違はないと思う。上の引用と下記の「城の崎にて」からの部分を見てみよう。

それは大きな鼠を川へなげ込んだのを見ているのだ。鼠は一生懸命に泳いで逃げようとする。鼠には首の所に七寸ばかりの魚串が刺し通してあった。(中略)鼠はどうかして助かろうとしている。顔の表情は人間にわからなかったが動作の表情に、それが一生懸命である事がよくわかった。(中略)鼠が殺されまいと、死ぬに極った運命を担いながら、全力を尽して逃げ廻っている様子が妙に頭についた。<sup>(11)</sup>

二つの引用文を比べながら、考慮すると、双方の作品に登場する鼠がほぼ同じ「死」との葛藤に苛まれて死んでしまうが、どちらにも

登場する主人公がまったく違う方向に進んでいる。同じ「城の崎にて」よりの次の部分も挙げよう。

自分は淋しい嫌な気持ちになった。(中略)今自分にあの鼠のような事が起ったら自分ははどうするだろう。自分は矢張り鼠と同じような努力をしはしまいか。自分は自分の怪我の場合、それに近い自分になった事を思わないではいられなかった。自分は出来るだけの事をしようとした。(中略)然し普段考えている程、死の恐怖に自分は襲はれなかったろうという気がする。<sup>(12)</sup>

この引用文から分かるように、どんなに主人公が「死」に近づきそうであっても、「生命」に必死にすがり付いている。それに対して、「冬の日」の主人公は「生きる熱意」を完全に失っており、「死」という逃れられぬ〈定め〉に対する抵抗を一切持っていないのである。

次に、「冬の日」の主人公と鼠との共通点があると考えられる。つまり、ひどい病気から逃れられない主人公は鼠捕りに捕まえられた鼠のようである。そして、「透明な水のなかで左右に金網」に沿って逃げ惑う鼠は、「冬になって肺を疼み」、清澄な「空気のなかで」呼吸困難の激痛を覚えている主人公のようである。最後に、不運の手でやがて「網目の一つへ鼻を突込んだまま動かなくなった」鼠のように、悲惨に「疼まれ」切った主人公もその内に肺病の手で死んでしまうというように読み取ることが出来るのであろう。=

言い換えれば、作者は「冬の日」その(一)で主人公の身の回りにある活気のなく、完全に「死」に征服されている自然を詳細に取り上げようとしたことに対して、「冬の日」その(二)では肺病に悶え苦しんだ主人公とその家族の悩みや弟妹の病死や幼いころ捕まえた鼠の「死」に関する〈回想〉に耽り、また、自分自身もいつか同じ情けない〈定め〉に遭遇しかける暗愁や悲しい物思いといった心の状態に苛まれてしまうのである。

また、ここで注目になるのは、「風景」というキーワードである。「冬の日」その(二)に目を通してみると、「風景」は四度出てくることが分かる。それは下記の「そして妹の延子も腰椎カリエスで、意志を喪った**風景**<sup>①</sup>のなかを死んで行った」<sup>(301頁)</sup>、「堯の頭には彼に

しばしば現前する意志を喪った風景<sup>②</sup>が浮かび上がった」<sup>(301頁)</sup>、「その遠くの交叉路には時どき過ぎる水族館のような電車。風景<sup>③</sup>は俄に統制を失った」<sup>(302頁)</sup>、と「生きて行こうとする意志をだんだんに持ち去っていた。(略)そういった風景<sup>④</sup>」<sup>(302頁)</sup>という四つの風景である。それらを考えてみると、それらに共通点はあると思う。というのは全て消極的な方向に進んでいるためである。それは主人公の心理的な状態を明らかにする一つの糸口だと思われる。また、全ての風景は、「生命」を崩壊し、「死」に係わっているものではある。

そして、更に細かい目で見てみると、二番目の「風景」は四番目の「風景」のまとまった内容だということが分かる。構造的な面から見ると、二番目の風景が来、そして「水族館のような電車と俄に統制を失った」風景及び「捕鼠器に入った鼠」の話が真ん中に入って来てから、また、作者が再び以上にまとまった形で取り上げた「生きて行こうとする意志を喪った風景」をより詳細に描写することにしたということが分かるのである。他方、内容的な面から考えてみると、それは主人公の頭に「死」に瀕しているというモチーフのしつこさをまざまざと明示するのではないかと考えられる。

さらに、「冬の日」その(四)では主人公が空想や想いから逃げ出すように、町へ場所や目的を定めず出かけたが、まるで「死」の〈回想〉に追いかけてられているようである。「堯はそんなときいつか電車のなかで見たある小女の顔を思い浮かべた。」<sup>(311頁)</sup>、「その美しい顔はひとめで彼女が何病だかを直感させた。陶器のように白い皮膚を翳らせている多いうぶ毛。」<sup>(311頁)</sup>のあるその少女は自分の死体の様な白い皮膚で主人公の頭に「死」のイメージを十分に刺激して活動させるに相違ないのではないかと考えられる。それには、堯の〈回想〉から次の部分も見てみよう。

「彼女はきっと病床から脱け出して来たものに相違ない」

少女の顔を絶えず漣漪のように起っては消える微笑を眺めながら堯はそう思った。

彼女が鼻をかむようにして拭きとっているのは何か。灰を落としたストーヴのように

、そんなとき彼女の顔には一時鮮かな血がのぼった。<sup>(311頁)</sup>

このような〈回想〉によって、「死」は主人公のみを取り囲んでいるのではなく、堯のように痰を吐くのに困る少女を襲っていることが分かるのであるが、ここでは、まるで「死」が主人公という小さな範囲のみではなく、その身の回りの世界というより広い範囲を脅迫しているようである。それは別稿に詳しく取り上げる「のんきな患者」における「死」のイメージと似通っているが、「冬の日」の堯は「のんきな患者」の主人公と違って、その身の回りに肺病に苛まれている貧しい患者の世界に気付かず、「死」に襲われている自分自身しか考えていない。

#### ④ 堯の「旅情」

次に、作者は「冬の日」その(三)に入ると、その(一)、(二)に圧倒的に見られた雰囲気や道を緩める。つまり、笹鳴きの鶯を迷わせるため、主人公が鶯の鳴き声を真似るユーモアのある話や道路で「子供たちが何かして遊んでいた」ことによって、自分が幼いころの過去に耽る話などという、以前によく見られた雰囲気や道があまりないのである。しかし、現実から多少でも逃れるように過去の幼いころの話をしたのではないかと考えられる。

そして、次の「希望を持てないものが、どうして追憶を慈しむことが出来よう。」<sup>(306頁)</sup>という部分は主人公の心理状態を明らかにする重要な文章であると論者は思う。この文章は主人公が回復の見込みのない人生ばかりを送るという意味をその胎内に宿っているのではないか。つまり、主人公の未来(希望)及び過去(追憶)から構成される人生のことである。そして、主人公は過去の思い出に耽っているうちに、急に目が覚め、生きて行こうとする意志を失ってしまった希望(未来)のない自分に、むしろ過去(追憶)を大切に思うことでさえ出来るわけではないだろうと思う。この文章は主人公が未来の人生のみならず、未来と過去の人生に絶望し、「死」に切迫されていることから、過去の追憶によって一時的に逃げようとするものであっても許容されないことをまざまざと明示しているのではないか。まるで、逃れられぬ〈定め〉に追われているようである。

また、主人公は不意に自分の「心を寄辺のない旅情で染めた。――食うものも持たない

。どこに泊るあてもない。」<sup>(308頁)</sup>ということを感じるのが当然なのであろう。つまり、未来と過去の人生に絶望した「自分の病気が約束している死の前には、ただ甘い悲しみを撒いただけで通り過ぎていた」<sup>(302頁)</sup>主人公はすでに自分にはこの世で拠り所はなく、自分のいるはずの場所がこの世と違う所だと思うのは必然の結果だと考えられるのではないか。

そして、あちらこちらに旅行をしたり、色々と引っ越したりするのが好きである梶井基次郎は「旅情」というような言葉を使うのがやはり不思議ではない。しかし、ここにあらわれる「旅情」は主人公の心理的状態・感情的状態をまざまざと示す非常に相応しくて、「冬の日」的なキーワードだと思う。生きて行こうとする意志を失ってしまい、死相を帯びた世を経由して、旅の終わりに近づいた主人公の気持ちを最もよく伝えるものであろう。また、その読み方をはっきりと確認するのは主人公が自分の部屋について語る「あの無感覚な屋根瓦や窓硝子をこうしてじっと見ていると、俺はだんだん通行人のような心になって来る。」<sup>(309頁)</sup>という一行である。主人公に「通行人」とはこの世を短い旅で通り過ぎたという気持ちなのではないか。だから、「通行人」は「旅情」と二重になり、また、主人公が「生命」に対する絶望とした気持ちの主張をよく通しているのではないか。

##### ⑤ 堯にとっての「冷静」

ここでは「冬の日」その(五)に見られる堯の「冷静」について考察したい。「しじゅう崩壊に屈しようとする自分を堪えていた。」<sup>(316頁)</sup>、また、「『俺もこの頃は考え方が少しちがって来た』」<sup>(319頁)</sup>、というのは「『俺はそんなときどうしても冷静になれない。冷静というものは無感動じゃなくて、俺にとっては感動だ。苦痛だ。しかし、俺の生きる道はその冷静で自分の肉体や自分の生活が滅びて行くのを見ていることだ』」<sup>(319頁)</sup> <2>、「『自分の生活が壊れてしまえば、本当の冷静は来ると思う。水底の岩に落つく木の葉かな・・・』」<sup>(320頁)</sup> <3>、「『・・・しかし、こんな考えは孤独にするな』」<sup>(320頁)</sup>という箇所で見られるのは、虚無的・頹廢的な芸術傾向いわゆるデカダンスが強く感じられるのである。

そして、「冷静で自分の肉体や自分の生活が滅びて行く」及び「自分の生活が壊れてし

まえば、本当の冷静は来ると思う。」という二つの行が見られるが、そこにおける「冷静」と「本当の冷静」の意味合いを考えてみよう。まず、「冷静」という語句は「檸檬」全集全体に「冬の日」という唯一の作品にしか現れていないのである。それは三箇所在五回しか出ていないのである。それは「夕餉をしたために階下へ下りる頃は、彼の心はもはや冷静に帰っていた。」<sup>(316頁)</sup> <1>及び、以上に引用した<2>、<3>の節である。それらは全部「冬の日」その(五)のみに現れるのであるが、作者がそれぞれを別の意味で使っているようである。<1>を見てみると、その「冷静」は「落ち着くこと」いわゆる普段の意味で使われているが、<2>では主人公は自分なりに「冷静」は「感動だ。苦痛だ。」という概念を定義しているのである。が、その定義を基盤として、<3>を考えてみよう。つまり、<3>の代わりに感動、苦痛を置き換えてみると、「自分の生活が壊れてしまえば、(＝生への訣別をする時になれば)本当の感動と苦痛は来ると思う。」という読み方が可能である。つまり、今のところでは肺病が感動と苦痛で自分、自分の生活を滅ぼして行くプロセスの最中であるが、悲愴な終わりをいよめる「死」に襲撃される時になったら、「本当の感動、苦痛が感じられると思う」、という風に読み取ることが出来ると考えられる。もちろん、以上の読み方は下に来る「水底の岩に落つく木の葉かな・・・」という文章に精通はしないが、その下に来る文章を考慮してみよう。主人公に当てはまる「木の葉」が水底の岩に落ち着くまでのプロセスを考える必要がある。最初にその葉(主人公)は強風(不治の病)で衰えて散らばり、水の表面(病の世界)まで運ばれる。そして、波(病の苦痛)に悲愴に打たれ切った結果は水底に沈着(死亡)し、最後に、底にある岩に穏やかに落ち着くということが言えるのではないだろうか。

そこで、<3>は<2>の逆の意味であることを明白に言い切るものであろう。それで、以上の一節を「健康な人生が送れなく、「生命」に訣別をし、死相を帯びた主人公の生きる道(肺病)は感動・苦痛いわゆる「冷静」で自分の肉体、生活が滅びていく。が、彼の生活が壊れてしまえば(死んでしまえば)、〈安らぎ〉すなわち穏やかに落ち着くことができるという風な読み方も出来るのではないか。そして、まさに堯が言う通り「こんな考えは孤独にするな

」というべきである。つまり、それは「死」に近付いているという感情に征服され切った主人公が最後に「死」に親しんでくるのである。あるいは、換言すれば、死ねば、安らぎを獲得することができるという完全に負けている気持ちの代わりに、自分に「死」に対する期待を持たせるといえるのではないか。が、ここに言う「親しみ」、「期待」は「Kの昇天」にあるものと全く違うのである。要するに、「Kの昇天」に見られる主人公の「死」に対する恐れ、期待は「死」が救いをもたらしてくれるという想念から発生して来るのに対して、「冬の日」に見られる主人公の「死」に対する期待は「死」が主人公を襲撃しに迫って来ているという主人公に耐え難い精神的な状態から生まれてくるのである。

#### おわりに

本稿では、「Kの昇天——あるいはKの溺死」、「桜の樹の下には」、「冬の日」という三つの「珠玉」を『檸檬』作品集の中から選り抜き、それらを分析しながら、そこにおける「死」はどのようなイメージを持っているかを検討してみた。そこで、「Kの昇天——あるいはKの溺死」の主人公は「死」によって、ある「生命」から別の「生命」に移転することを指摘した。つまり、分身であるK君という人物は、月世界へ昇天することによって病の苦悩などの辛いことばかりであふれた生活から助けだされと思ったのではないか。しかし、それはK君の身体のみは無痛の「死」のである。その身体のみ「死」に対して、魂が「生」を獲得できたのである。

さらに、昇天へのプロセスの最後に来る「死」によって、K君が望ましい月世界に移ることが出来るということは、昇天へのプロセスにおいて「死」が本質的かつ最も重大な役割を果たしていることを意味する。要するに、まるで「Kの昇天——あるいはKの溺死」における「死」は救い主の役割を演じているようである。言い換えれば、「Kの昇天——あるいはKの溺死」における「死」はあたかも必死に要請されている「生命」への手段のように現れているのではないかと思う。

また、「桜の樹の下には」では調整者かつ美の裏に存在して保障するイメージがあると指摘した。要するに、「桜の樹の下には」にお

ける「死」のイメージは主人公の憂鬱を完成させることによって、美が主人公の心に引き起こした畏怖の念を無くしたり、また、桜の樹がそんなに見事に咲かせる水晶のような液を提供したりしているという肝心な二重の役割を果たしていると言えるのではないか。

一方、最後に取り上げた「冬の日」で、主人公及びその家族だけでなく、その周囲の桜、樫、樺、百舌鳥、椋鳥などまでを襲撃し、逃れられぬ〈定め〉のイメージがあると指摘した。それだけではなく、以上の考察から「冬の日」における「死」のイメージは「Kの昇天——あるいはKの溺死」、「桜の樹の下には」とまったく違うのが極めて明白に分かった。というのは、例えば、上述したように「Kの昇天」における「死」のイメージは「生命」への手法のようであることに対して、「冬の日」に現れる「死」は健康な人生を送ることに絶望した主人公の悲愴な〈定め〉のようである。要するに、「Kの昇天——あるいはKの溺死」、「冬の日」における魂は身体「外界」に逃れようとしているが、「死」のイメージは正反対の方向に進んでおり、別の姿で描かれているしのである。

以上から、本論で取り上げた三つの作品において、「死」が様々なイメージを持っており、そして、それぞれが非常に違う調子で表現されていることが分かる。つまり、三つのイメージを考えると、全てが激しいポジティブ及びネガティブのみに限られていることが分かる。

最後に、本稿では紙幅の制限上取り上げられなかった、「城のある町にて」、「ある崖上の感情」、「交尾」、「冬の蠅」「のんきな患者」などといった「死」のイメージが豊富な作品については別稿に論じ、これまで明白にした「死」のイメージとどのように関わるか比較したい。

#### 【注】

- (1) 福田真人『結核の文化史』（名古屋大学出版会、1995年5月）。更に、公益財団法人結核予防会結核研究所HPに掲載されている「表3 結核死亡数および死亡率の年次推移」を2014年03月01日（午前11時11分）に参照した。

- [http://www.jata.or.jp/rit/ekigaku/index.php/download\\_file/-/view/2161/](http://www.jata.or.jp/rit/ekigaku/index.php/download_file/-/view/2161/)
- (2) 鈴木貞美『年表作家読本 梶井基次郎』(河出書房新社、1995年10月、7頁)
- (3) 同上、7頁。
- (4) 『新潮文庫 大正の文豪、CD・ROM版』(新潮社版、1997年)
- (5) 中谷孝雄『梶井基次郎』(筑摩叢書、1985年5月、196-197頁)
- (6) アクセル・ラングランセン、清田正喜訳「『Kの昇天』の構造分析—あるいは『Kの昇天』の解説—」(『表現研究』第23号、1976年3月、37頁)
- (7) 大塚常樹「梶井基次郎『Kの昇天—或はKの溺死』の構造と戦略」(『国文』お茶の水女子大学国語国文学会、2001年1月、70頁)
- (8) 大塚氏、前掲論文、73頁。さらに、大塚氏は前掲論文の注(8)において、「Kがホモセクシャルである可能性も示唆されている。とすれば『あなた』は男性である可能性もある」ということまで述べる。
- (9) 鈴木氏、前掲論文、174頁。
- (10) 鈴木貞美(『梶井基次郎 表現する魂』新潮社、1996年3月、260頁)
- (11) 志賀直哉(『志賀直哉 全集第三卷』岩波書店、1999年2月、7-8頁)
- (12) 同上、8-9頁。
- 【付記】  
本文の引用文は『ちくま日本文学全集 梶井基次郎』(筑摩書房、1999年6月)を使用した。



## صور الموت في أعمال الكاتب الياباني موطوجيرو كاجي

وائل محمد عرابي عبدالمقصود

أستاذ مساعد، قسم اللغات الحديثة والترجمة، كلية اللغات والترجمة، جامعة الملك سعود  
asd1975jpp2001@yahoo.com

(قدم للنشر في ١٤٣٥/٦/١ هـ؛ وقبل للنشر في ١٤٣٥/٧/٧ هـ)

**الكلمات المفتاحية:** موطوجيرو كاجي، الأدب الياباني الحديث، الموت، "صعود كيه للقمر، أو غرق كيه"، "تحت أشجار الكرز"، "أيام الشتاء".

**ملخص البحث.** يهدف هذا البحث إلى دراسة صور الموت في أعمال الكاتب الياباني موطوجيرو كاجي (١٩٠١-١٩٣٢م) الذي يوظف في أعماله صوراً عديدة للموت. ينسب معظم الباحثين مثل هذه الصور، واهتمامه بالموت لإصابته بمرض السل في سن مبكرة. أما الباحث فلا يُنكر تأثير ظروف الكاتب المرضية على أعماله الأدبية، لكنه في نفس الوقت يؤكد على أهمية النظر بعين الاعتبار لموهبته الأدبية الفريدة. ويقدم تحليلاً لثلاثة أعمال من أشهر أعمال موطوجيرو كاجي ذات علاقة وثيقة بالموت. ولا تقف هذه الدراسة عند رصد صورة الموت في كل عمل فقط، بل تتطرق لعلاقة صورة الموت في الأعمال الثلاثة ببعضها البعض. وتخلص في النهاية إلى عدم توقف صورة الموت في أعمال الكاتب عند الصورة التقليدية للموت، بل تتجاوز ذلك لصورة جمالية كما في "تحت أشجار الكرز"، أو صور خيالية كالوسيلة للتخلص من المرض والانتقال لعالم القمر حيث حياة الروح بدون آلام كما في "صعود كيه للقمر، أو غرق كيه". ويتقدم الباحث بخالص الشكر لمركز بحوث كلية اللغات والترجمة وعمادة البحث العلمي بجامعة الملك سعود على الدعم المالي المقدم لهذا البحث.

## Images of Death in Motojirō Kajii's Works

**Wael Mohamed Orabi Abdelmaksoud**

*Assistant Professor, Department of Modern Languages and Translation,  
College of Languages and Translation, King Saud University  
asd1975jpp2001@yahoo.com*

(Received 01/06/1435H.; accepted for publication 07/07/1435H.)

**Keywords:** Motojirō Kajii, Modern Japanese literature, Death, “The Ascension of K, or K’s Drowning”, “Under the Cherry Trees”, “Winter Days”.

**Abstract.** Motojirō Kajii employed many images of death in his works. Most reseachers attribute such images to the experience of being infected with tuberculosis at a young age. In this paper, I do not deny the influence of the conditions of his illness, but at the same time emphasize the importance of his literary talent. I analyzed three works that were evaluated as famous short stories to catch the images of death. In conclusion, the images of death in Motojirō Kajii's works can be read in a variety of ways that could be classified as not just traditional images, but also as aesthetic and fictional images. And this makes the experience of reading his works more enjoyable.